

PHOTO ESSAY-23-

東広島キャンパスの生き物



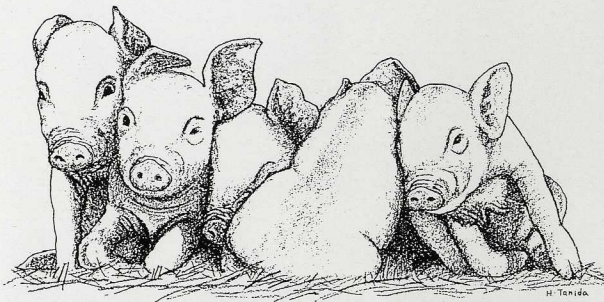
写真挿絵 谷田 創
Tanida, Hajime
(生物生産学部附属農場)



顔のつくりは大型種の子豚とほぼ同じでかわいい

豚

Sus scrofa var. domesticus



物思いにふける子豚？ 大型種の子豚に比べるとミニブタの背中少し湾曲している



農場所属の4年生に抱かれる子豚 人によく慣れる

一体、キャンパスのすぐ近くに家畜の住処があるなどとは、ほとんどの人は信じてはくれまい。それがあつたのである。生物生産学部附属農場という穴場が。今回のテーマの豚もいる。

豚と聞いて人はどのようなイメージを思い浮かべるだろうか。ふとちよ、不潔、のろまなどあまり良いイメージをもっていないのではないかな。欧米諸国でも豚を意味する単語は人を罵倒する時に使われている。英語では強欲野郎 (Big)、フランス語ではこん畜生 (Cochon)、ドイツ語ではすけべ野郎 (Schwein) と何もかもで思うくらいにまで蔑まれていた。

それでもそれは、聖書においても豚は汚れた動物として扱われている。旧約聖書の「レビ記」の第十一章には、「地にあるすべての獣のうち、あなたがたの食べることができる動物は次のとおりである。獣のうち、すべてひづめの分かれたもの、すなわち、ひづめのまったく切れたもの、反芻するものは、これを食べることができる」と書いてあり、イスラエルの民に対して食べてもよい動物を具体的に定めている。家畜でこの範疇に入るのが牛や羊である。

一方、決して食べてはならない動物の中に豚が入っている。「豚、これは、ひづめが分かれており、ひづめが全く切れているけれども、反芻することをしないから、あなたがたには汚れたものである。あなたがたは、これらのものを肉を食べるべきではない。またその死体に触れてはならない。これらは、あなたがたには汚れたものである」と記されている。

このように聖書においても豚が不浄なものとしてみな嫌われているのであるが、それは当時の遊牧民における生活の知恵だとする説もある。羊などはその習性として群集性と追従性に富んでおり、放牧や群れの移動が容易に行えるのに対して、群れるという習性を持たない豚は遊牧には不向きであるため、それを飼うことを戒めたというのである。

理由はともあれ、聖書にまで悪く書かれたことは、豚にとつても悔やまれるところではないだろうか。生きている間はこのような口汚なく罵られる嫌われ、死んでしまつたら反対に多くの人に喜んで食べられる動物は他に類を見ないのである。まさに豚受難である。

一般の人にとって豚は食べる対象ではあつても

見たり触つたりする対象ではない。実際、豚を見たいと思つても動物園ではほとんど見かけることがないし、牧場でも牛は放牧されているが豚はない。となると、私たちは得たいの知れない物体を黙々と食べて生きているのだろうか。そう考えると、毎日、重要な目的のために生きているはずの私たち人間の生活も、案外底が浅いと思えてきてしまう。得たいの知れない物に頼つて生きて現代の私たちは、それでも幸せなのだろうか。少しだけ考えてみよう。そこで、その正体を少しだけ明かしておこう。

牛はその野生原種がすでに絶滅してしまつていて、豚は今でも原種が生存している。それは広島にも生息しているイノシシである。豚は不潔だと思われがちであるが、元来棲る場所を排泄場所と採食場所から離して生活する習性がある。排泄物や餌の臭いを自分の休む場所から遠ざけることで、外敵から自分の存在を悟られないようにするイノシシの習性を受け継いだものであると言われている。

ここで掲載写真の説明をしておく。この豚は一ヵ月齢のミニチュアピッグ (ゲッチングン系) で、成豚になつても四十センチくらいに成長するから、私の食用になる豚は、三百センチに成長するから、それに比べればやはりミニチュアである。体が小さいというこの利点を生かして、最近では実験用動物として利用されつつある。しかし、お手やお座りといった芸をわりあい簡単に覚えるので、米国ではミニチュア豚がペットとして飼われ始め、書店に行けば犬・猫の飼育の本に混じつて豚の飼育の本がたぐささん並ぶ昨今である。

人間と動物との関係とは、相手が家畜であるかと野生動物であるかと命と命の交歓であると感じる。その意味で農場は食料を生産する場であるとともに、私たちが生命の触れ合いを実感できる数少ない場ではないだろうか。日本では捨て犬や捨て猫が問題となつているが、米国では人間と動物との関係に関する国際学会も設立されており、人間と他の生き物との関係を真剣に考える時が来ているようである。最近広大でも心の病を持つ学生さんが増えつつあるが、家畜などの動物と接することによって不安症状を和らげる動物介在療法 (Animal Assisted Therapy) の研究も進みつつある。何はともあれ、晴れた日だけでも一度農場に足を運ばれてみては……。